

接触場面のコードスイッチングが
参加者に与える影響
——多言語を背景にした大学院生のグループ
ディスカッションを対象に——¹⁾

田 崎 敦 子

Influence of code-switching on Japanese
and international students in group
discussions at graduate school

TASAKI Atsuko

Japanese and international students at a graduate school of science and technology are expected to work together to complete their research activities. However, their native and nonnative status of Japanese can make them unequal in the process of communication, which may affect their research activities. In order to compensate for the lack of Japanese ability of the international students, both Japanese and international students use code-switching from Japanese into English in their communication. This paper analyzed their code-switching in group discussions and examined how the use of English influenced their way to participate in communication, and their relationships. The results show that code-switching changes their relationships from native-nonnative speakers of Japanese, to nonnative speakers of English, and also “Japanese-English speakers.” These roles help them to be equal in terms of language use and participate more equally in the discussions. As they continue to communicate with each other with these changes, they create their own communication style, which helps to enhance their rapport. This active communication where they use their own styles and balance their relationships will support their research activities at graduate school.

キーワード: 二言語使用、大学院留学生、共同研究活動、日英混合話者、英語非母語話者

はじめに

近年、日本の大学院では国際化の一環として積極的に留学生を受け入れている。留学生が大学院で学位を取るためには、日本人学生と共に、意見交換をしながら専門分野の知識を深めていく必要があり、両者のコミュニケーションが研究活動を行う上で非常に重要である。しかし、留学生数が増えてその背景が多様化した結果、日本語でコミュニケーションできる能力を十分に備えていない者も多くなった。このような限られた日本語能力の留学生と日本人学生のコミュニケーションでは、英語へのコードスイッチング(以下、CS)が頻繁に使われる(三牧 2005)。国際語としての英語使用が広まり(Crystal 1998)、日本人学生と留学生の英語能力が向上している現在、留学生の日本語能力を補う手段として英語を使用する機会は今後とも増えるであろう。日本で学ぶ留学生の大半は非英語圏出身であるため、日本人学生と留学生が英語を使用した場合、それは英語非母語話者同士のコミュニケーションとなる。

ファン(1998、2006、Fan 1994)は、接触言語による接触場面の分類を提起している。その中で、参加者のどちらかが相手の言語を用いてコミュニケーションを行う場面、つまり参加者が母語話者(以下、NS)一非母語話者(以下、NNS)となる場面を「相手言語接触場面」、参加者の双方が自分の言語ではなく第三者の言語を使用するNNS同士のコミュニケーションを「第三者言語接触場面」とし、それぞれの場面で参加者のコミュニケーションへの参加方法が異なると述べている。では、同じコミュニケーションの場面で、参加者が日本語と英語を使う場合、彼らはどのようにコミュニケーションに参加し、どのような関係を構築するのだろうか。本研究が対象とする日本人学生と留学生は、共に研究活動を行う上で大学院生として対等な立場で話し合いをする必要があり、彼らのコミュニケーションにおいては相互理解を達成させるだけでなく、コミュニケーションへの参加方法、関係構築が非常に重要である。したがって、英語へのCSが彼らの参加方法や関係に与える影響を考慮しなければ、それが効果的なコミュニケーションの手段であるかどうかは判断できない。

二言語使用の影響を見るためには、その二言語がどのように切り替えら

れるのか、つまり CS を分析する必要がある。そこで本研究では、研究活動において英語を頻繁に使用する理工系大学院の日本人学生と留学生を対象に、彼らのグループディスカッションにおける日本語から英語への CS を分析し、二言語使用が両者に与える影響を明らかにする。

1. 先行研究

1-1. 接触場面における参与者の関係

ファンは(1998、2006)、言語管理理論にもとづき日本語の相手言語接触場面におけるコミュニケーションを分析した。その結果、NS と NNS はそれぞれ言語ホスト、言語ゲストとしての役割を担いコミュニケーションに参加していることがわかった。言語ホストである NS は「接触言語のオーソリティー」となり、会話を維持し相互理解を確立するために、語彙の簡略化、発話の減速化、話題の提供などで NNS の言語問題を調整し、会話をコントロールする傾向がある。一方、言語ゲストである NNS は、参加の回避や言語ホストに支援を求めるなどの達成ストラテジーを使用しながら、自らの言語問題を調整するという。

同じく、日本語の相手言語接触場面を分析した一二三(1999)は、NS が NNS と会話をする際の意識面と言語面の関連について明らかにするために、母語場面との会話の比較分析、質問紙調査を行った。そして、NS は NNS に対して主導的役割の必要性を感じ、会話を円滑に進める配慮をする傾向があることを示した。これは、ファン(1998、2006)が明らかにした言語ホストの心理、言語行動と共通する。日本語の相手言語接触場面において、NS—NNS がこのような非対称なコミュニケーションへの参加をしているとすれば、両者が対等な関係を構築することは難しい。

これに対し、参与者が共に日本語 NNS である第三者言語接触場面のコミュニケーションでは、接触言語のオーソリティーである NS が存在せず、言語ホスト、言語ゲストという関係が成立しないため、言語ホストとして会話を管理する言語行動がなくなり、参与者が協同で解決しようとするストラテジーがより多く使用され、コミュニケーションへの参加を回避する

ストラテジーの使用が減少するという(ファン 1998、1999)。本研究の対象者は、英語使用場面で NNS 同士となるが使用言語が英語の場合にも NS が会話の進行をコントロールする NS—NNS の場合と比べ、同レベルの NNS 同士のコミュニケーションでは、参加者がより協力的に言語能力を補い合い、言語使用範囲も拡大されたことが報告されている (van Leir and Matsuo 2000)。つまり、日本語使用でも英語使用でも、第三者言語接触場面では言語使用の面でより対等な関係が構築されやすいといえる。

このように、相手言語接触場面、第三者言語接触場面では、参加者の役割・参加方法が異なることがこれまでの研究で明らかにされている。しかし、それは使用言語がひとつということが前提であり、本研究のように同じ参加者が日本語、英語を使用し、相手言語接触場面、第三者言語接触場面を創造する場合、これまでの研究結果をそのまま適応することはできない。

1-2. 日本語の相手言語接触場面におけるコードスイッチング

日本語の相手言語接触場面においては、英語への CS が NNS の日本語能力を補い、相互理解を深める手段として使われていることが報告されている(大平 2000; 久保田 2004; 服部 2001)。さらに、こうした CS には単に日本語の語彙を補償するだけでなく、談話の促進や調整をする、感情的にインパクトを与えるなど、コミュニケーションをより豊かにする効果もある(久保田 2004; 服部 2001)。これらの研究により、日本語接触場面における英語への CS の機能や効果が明らかになったが、それはコミュニケーションにおける CS の局所的な使用に注目したに過ぎず、使用言語の変化が参加者に与える影響については分析されていない。

では、使用言語の変化が参加者に与える影響はどのように示すことができるのだろうか。Jacoby and Oches (1995) は、コミュニケーションとは話し手と聞き手の相互行為であり、両者が協働的に作り上げるものだと述べている。話し手と聞き手は、インタラクションを通してメッセージの意味、相手との関係、アイデンティティーなどを共に形成する。そして、そのインタラクションの流れは直前の発話にどのように反応するかによって

決まるという。こうしたコミュニケーションの協働構築の考えにもとづくと、CS による参与者の関係の変化は、言語の切り替えがどのように引き出され、CS が含まれた発話がどのように応答されるのかを分析することで明らかになると考える。

2. CS の定義

言語の切り替えについては、その特徴により「CS」、「借用 (borrowing)」、「混用 (code-mixing)」という区別がある。CS は、「二つの独自の文法システムのそれぞれの内部規則にそって、話者が意識的あるいは無意識的に作った糸のようなものを、意味のある並置をすること」と言われるように、話し手が意識的・無意識的に使う場面を含める。また、CS は言語交替が単語や句、文レベルで生起する。一方、借用は形態素的・音韻的にベースとなる言語に組み込まれ、その一部となった単語であるため、ほとんどの場合一言語話者にも無意識に使用されるという特徴がある (Grosjean 1982; Gumperz 1982/2004: 83、訳とページは花崎の訳書による) とされるように、話し手が意識的・無意識的に使う場面を含める。また、CS は言語交替が単語や句、文レベルで生起する。一方、借用は形態素的・音韻的にベースとなる言語に組み込まれ、その一部となった単語であるため、ほとんどの場合一言語話者にも無意識に使用されるという特徴がある (Grosjean 1982; Gumperz 1982; Myers-Scotton 1990; Poplack 1980)。

混用は、借用と同様、文中の単語レベルの切り替えであるが、特にベースとなる言語能力を補うために使われる言語の切り替えを指す。また、ベース言語と形態素的・音韻的に一致しない点では CS と共通するが、他の言語の代用にしかすぎない点では言語交替自体にコミュニケーション上特別な意味を持つ CS とは異なる (Bokamba 1988; Sridhar and Sridhar 1980)。

このように CS、借用、混用には、それぞれの特徴があるが、NS、NNS を対象にした本研究では、一言語話者も日常生活で使用している借用は NNS 特有の言語交替ではないため対象から外す。混用については、言語能力の低い NNS の言語交替の大きな特徴のひとつと捉え、CS に含めることとする。

3. 分析対象・分析方法

本研究では、都内の理工系大学院で学ぶ日本人学生と留学生が行った10組の日本語によるグループディスカッション(日本人2名、留学生2名、約30分間)を分析対象とする。こうした構成のグループディスカッションを対象としたのは、複数のNS、NNSが参加することにより、NS—NNS間だけでなく、NS同士、NNS同士など、よりダイナミックなやりとりが観察されたと考えたからである。留学生の出身国は、インドネシア(4名)、ベトナム(4名)、バングラデッシュ(4名)、中国(3名)、ブラジル(2名)、ラオス(2名)、以下、ブルガリア、マダガスカル、ロシア、カンボジア、韓国が1名ずつである。ディスカッションは、日頃研究室で接触場面のコミュニケーションの機会が多い日本人学生と留学生に参加を依頼した。参加者は互いに顔見知りである。参加者にはディスカッションを録画すること、録画資料を研究目的以外に使用しないこと、また個人情報を保護することについて事前に説明し、同意を得た。

また、ディスカッションの目的は与えられた話題について全員が意見を出し合い、考えを深めることにあることを予め説明し、参加者から理解を得た。その際、グループで結論をひとつにまとめる必要がないことも確認した。留学生の日本語能力は中級程度(8~12ヶ月の学習暦)である。英語能力はTOEFL 500~600点で、全員日本語より英語能力の方が高いと報告している。日本人学生の英語能力はTOEFL 490~560点の範囲である。

ディスカッションの話題については、話題に関する参加者の知識の有無が参加者の談話上の役割に影響することを考慮し(宮副ウォン 2003; Zuengler and Bent 1991)、日本人学生・留学生が同じ「大学院生」としてそれぞれの視点で関われる話題として「理想的な指導教員」、「理工系大学院に必要な英語教育」を設定した(各グループは、どちらか一つのトピックについて話し合った)。ディスカッションは10名程度が入る小さめの教室で行われた。筆者はディスカッションの目的や方法について説明した後、席を外した。

ディスカッションは、すべて録画・録音し、それを文字化した。さらに、

参与者のコミュニケーション活動をより詳細に把握するために、ディスカッション直後に個別にフォローアップ・インタビューを行い(留学生には日本語と英語を使用)、意思の疎通を図るための工夫、困難点、CSの使用理由、CSに対する考えなどについて尋ねた。

以上の録画資料、文字化資料、そしてフォローアップ・インタビューの結果をもとに日本語から英語へのCSをすべて抽出し、CSの前後の発話を分析することで、参与者のコミュニケーションへの参加方法を見ていく。また、その中で参与者がどのような関係を構築するのかを明らかにする。

4. 結果と考察

日本人学生と留学生のディスカッションでは、単語、句、節、文レベルの英語使用が観察された。CSが含まれたやりとりを分析した結果、そこで参与者は使用言語により「日本語 NS—NNS」、「日英混合話者」、「英語 NNS 同士」という関係を構築していることがわかった。

4-1. 「日本語 NS—NNS」のやりとり

留学生は、表現したい日本語がわからない場合、英語を使って日本人学生に質問することがある(例 1、942: IF1)。²⁾

また、留学生は、日本人学生が使った日本語がわからない場合に、理解困難を示したり(Varonis and Gass 1985)³⁾、聞き返しをしたりすることがあり(尾崎 1992)、それに対して日本人学生が英語で意味を教えるという場面も観察された(例 2 参照)。

例 1・2のように、留学生が日本人学生に日本語の語彙について尋ね、日本人学生がそれに答えるということは、両者が日本語 NS—NNS として参加していることを示している。英語使用は日本人学生と留学生を日本語 NS—NNS の関係から解放するのではないかと思われたが、逆に NS—NNS の特徴的なやりとりである意味交渉の手段として使われ、NS—NNS の関係を引き出していた。

(例1) [指導教員と学生のやりとりについて]

942	IF1:	えーと、うーん、あー、質問、質問が来て、え、うーん(2)学生、 学生が、えーと、うーん、あ、think って日本語で何ですか？
943	JF1:	あ、考える？
944	IM1:	うん、考える。
945	IF1:	考える＝
946	JF1:	うん。
947	IF1:	＝がいいと思う。

(J-Japanese student, I-International student, M-Male, F-Female)

(例2) [指導教員の教え方について]

152	JM4:	ひとつの考え方じゃなくて、こう、他の視点をくれるっていうか、
153	IM3:	え？
154	JM4:	あ、他の視点、なんだろう、another point of view?
155	IM3:	ああ、そうですね。
156	JM4:	うん、another point of view を、くれる人っていうのは、やっぱりいい先生＝
157	JM5:	うん。

4-2. 「日英混合話者」としてのやりとり

(1) 英語の語彙・句の使用

例1のように、留学生が質問した後で日本語の語彙を学び、その後のやりとりでその語彙を使えば、そこでは日本語使用が前提とされ、日本語NS—NNSの関係は続く。しかし、例2の日本人学生JM4は、日本語の意味を英語で説明した後、その英語を日本語の中に組み込み、やりとりを成立させている(156: JM4)。本稿では、このように日本語の意味を説明するためではなく、発話内容を伝える手段として日本語に混ぜて英語を使う

(例3) [指導教員の担当する学生数について]

787	IF3:	=先生が、そういうテーマのときには、こういできました。私 があとに compare, compare します =
788	IF2:	[あー。]
789	JM2:	[あー。先生の考えと自分の考えを compare するってことね。]

ことで、日本人学生と留学生が相互理解に達し、話題を発展させた場合、両者を「日英混合話者」と呼ぶこととする。

日英混合話者として語彙を埋め込む例は他にも観察された。例3で留学生787: IF3は、「比べる」という日本語の表現がわからなかったが、例1のように日本人学生に尋ねることはせず、発話の一部に“compare”を挿入し発話を完成させている。これを受けた日本人学生789: JM2は、その英語を修正することなくそのまま使用した。このように英語を日本語発話に挿入することにより、日本語の語彙がわからない場合も、IF3は日本人学生に尋ねたり、コミュニケーションへの参加を回避したりせずやりとりを続けた。その結果、話し合いの流れが中断されることなく、言語面において日本人学生とより対等にディスカッションに参加することができた。

JM2はフォローアップ・インタビューで、英語使用の継続は日本語としてはおかしいが、留学生がわかりやすい表現だと思ったのでそのまま使ったと報告している。JM2は留学生とのコミュニケーションを円滑に進めるために、正しい日本語を使用する日本語NSとしてではなく、日英混合話者としてコミュニケーションに参加したのである。

こうした日本語発話への英語の語彙の挿入は、他にも「take careする」、「developすれば」などの様々な例が観察された。英語の動詞を名詞化し「する」という動詞と共に使うのは、英語圏に住む日系人のCSに頻繁に観察される使い方である(Azuma 1997; Nishimura 1995)。二言語の能力が高く、日常的に二言語を使って生活している日系人と同様のCSが本研究の対象者に観察されたということは、日本人学生・留学生とも二言語話者としての側面を備えていることを示している。

(2) 英語の節・文の使用

留学生は、表現したい内容が複雑で日本語では伝えられない場合、英語の節や文を使用することがある(例 4: 87: IF2, 89: IF2, 例 5: 204: IF3, 206: IF3)。例 4 で、87: IF2 は研究を行う上で難しい点を述べようとしたが、途中で日本語で発話を続けることができなくなった。しかし、英語への CS を使い考えを伝えることに成功している。ここで IF2 は、例 3 の IF3 同様、コミュニケーションへの参加回避や日本人学生への援助依頼はしていない。この英語発話に対して、88: IF3, 90: JM2 は日本語で応答してコミュニケーションを達成させており、ここでも参加者は日英混合話者として参加したといえる。

(例 4) [研究上の困難について]

87	IF2:	そして、私は、あの、when I have trouble how to do research=
88	IF3:	あー。
89	IF2:	= Yeah, first we have no idea about how to do research. We first want to learn it.
90	JM2:	そうですね。研究の方法はわからないと困りますよね。

この場面について、IF2 は英語使用により日本語では表現できない複雑な内容を伝えることができ、ディスカッションへの参加を高めることができたとフォローアップ・インタビューで報告している。一方、JM2 は IF2 の英語は容易に理解でき、IF2 が英語を話したことには全く抵抗がないと述べている。自分の応答については、英語で言われたので英語で答えたほうがいいのかもしいと思ったが、本来日本語のディスカッションであること、また日本語の方が話しやすいことから、日本語で答えたという。JM2 は、留学生の英語発話を日本語に訳すことなくそのまま英語で理解するなど、英語 NNS として参加しながらも日本語で応答することで、日本語 NS の立場も維持している。このように、留学生が英語で意見を述べ日本人学生が日本語で応答してコミュニケーションを達成させる場合、留学生は日本語 NS の助けを借りずに言いたいことを表現でき、日本人学生は

英語を話す負担を感じずにやりとりに参加できるという利点がある。

4-3. 「英語 NNS 同士」のやりとり

英語の発話に対しては、次の話し手がそのまま英語で応答する場合もある。例 5 では、指導教員との関係について話している中で、IF3 が日本語で意見を述べるのが難しくなり英語に切り替えた。ここで、204: IF3 が英語の語彙を探していると、205: JF2 がその語彙を提供している。この助けにより完成した英語発話に対し(206: IF3)、207: JF2 は英語で受けたため、IF3 と JF2 は日本語を全く使用しない英語 NNS 同士としてやりとりを完成させたことになる。また 207: JF2 では、IF3 の意見への追加情報、JF2 の解釈が述べられており、どちらかが相手の言語能力を補うことなく、両者が対等にコミュニケーションに参加しているといえる。

(例 5) [指導教員との関係について]

204	IF3:	= something like that, it's very difficult to, uh-, how to say,
205	JF2:	Good relationship?
206	IF3:	Yeah, good relation with, with students.
207	JF2:	We feel easy to talk and he understands our feeling.

フォローアップ・インタビューで、JF2 は、IF3 が英語を使ったことで意思の疎通が容易になったと、CS を肯定的に捉えている。自分自身の英語については、言いたいことが正確に理解されるか不安で、日本語使用の時にはない緊張感があると振り返っている。このコメントから、JF2 は会話をコントロールしようとする日本語 NNS ではなく、心理的にも外国語を話す英語 NNS として参加していたことがわかる。一方、IF3 は日本語より能力の高い英語を使うことにより話しやすくなったこと、また JF2 の応答も英語だったので理解しやすかったことを報告している。こうした感想は、IF3 も言語面・心理面で英語 NNS として参加していたことを示している。

英語 NNS 同士のやりとりは、意見交換だけでなく、冗談を言う場面に

も見られた。例6では、留学生 IM1、IF1 が日常の言語使用について話している。その中で、699: IF1 は日本の大学では、英語や日本語を混ぜて使うので頭の中が混乱してしまうこと、そしてそこには母語であるロシア語はほとんど存在していないという冗談を言い、他の参与者全員から笑いが起きている。ここで参与者は、日本語を介さず英語での冗談をそのまま受け笑っていることから、英語 NNS として参加していると見なすことができる。冗談には参与者の関与を強め、共感を作り出す効果があるが(佐々木 1994)、限られた日本語能力の留学生には日本語で冗談を言うことは難しい。また、冗談を言うために日本語について質問したり、英語で言った冗談を日本人学生が日本語に訳したりしてはおかしさが半減する。しかし、全員が英語 NNS として参加することにより、こうした問題が解決され、留学生も自ら冗談を言い、他者の笑いを引き起こす積極的な参加を実現することができた。

(例6) [日本での使用言語について]

697	IM1:	なんか、私たちも、なんか native speaker ではないから。
698	JF1:	あー。
699	IF1:	うん、はい。English and Japanese are mixed up in my brain. With just a little Russian.
		(全員の笑い)

5. まとめと今後の課題

本研究で対象とした日本人学生と留学生は、グループディスカッションにおいて CS を使うことにより、日本語の相手言語接触場面から英語の第三者言語接触場面へ転換させるだけでなく、日本語と英語を混ぜ自分たちで表現を創造しながら日英混合話者として独自の接触場面を作り出していた。こうした使用言語の変化により、参与者の参加方法が相手言語接触場面の特徴的な非対称なものから、より対称的になることがわかった。また、

接触場面のコードスイッチングが参与者に与える影響

日本語を話す際には留学生に日本語を教え会話をコントロールする立場にいた日本人学生が、英語使用になると外国語を話すことの不安や緊張を経験し、日本語 NNS である留学生に心理的に近づく場面も観察された。CS は日本語 NS—NNS というやりとりを完全になくすことはないが、このような多様な言語使用の過程では日本語 NS—NNS という関係もバリエーションのひとつであり、日本人学生がコミュニケーションをリードする非対称な関係を決定づけるものではない。

日本人学生と留学生が二言語を切り替えながら相互理解を図ると同時に多様な関係を構築しているということは、そこに彼ら独自の言語コミュニティーが創造されていると捉えることができる。このように自分たちのコミュニケーションの方法を築き、お互いの関係のバランスをとりながらコミュニケーションを促進させることは、対等な大学院生として活発な議論をするための大きな助けとなるはずである。

今回の結果から、接触場面の使用言語が参与者のコミュニケーションへの参加方法や関係に大きな影響を与えることがわかった。今後、日本語の接触場面における英語への CS がコミュニケーションの展開や参与者に与える影響をさらに詳しく見るためには、言語を切り替えることによりコミュニケーションが阻害されることはないのか、またコミュニケーションの規範はどのように扱われるのかなどを調べる必要がある。今後も接触場面の CS 分析を進め、使用言語とコミュニケーションの様々な側面との関係を明らかにしていきたいと考えている。

注

- 1) 本研究は「公益信託 日新製糖奨学育英基金」の助成による。
- 2) 文中の表で使用した文字化の記号は以下のとおりである。
 - 、：発話の区切り。ごく短い沈黙
 - ()：沈黙。括弧内の数字は、沈黙の秒数
 - 。：発話の終了(下降イントネーション)
 - ?：発話の終了(上昇イントネーション)
 - ：音の引き延ばし
 - []：同時発話
 - =：発話が切れ目なく続いている

- 3) Varonis and Gass (1985) は、理解困難の表示 (indicator of non-understanding) を、(1) 理解困難を明確に表示、(2) 直前の発話の単語や句の繰り返し、(3) 非言語による反応、(4) 要約、(5) 驚きの反応、(6) 不適切な反応、(7) 明らかな訂正に分類している。

参考文献

- 大平未央子 (2000) 「日本語の母語話者と非母語話者のインターアクションにおける相互理解の構築——関連性理論の観点から」『日本語教育』105号、71-79頁
- 尾崎明人 (1992) 「『聞き返し』のストラテジーと日本語教育」カッテンブッシュ寛子ほか 編『日本語研究と日本語教育』名古屋大学出版会 (251-263頁)
- ガンパーズ、J. (井上逸兵・出原健一・花崎美紀・荒木瑞夫・多々良直弘 訳) (2004) 『認知と相互行為の社会言語学』松柏社
- 久保田満里子 (2004) 「英語話者が日本語でコミュニケーションする際生じる問題」宮崎里司・ヘレン・マリオット 編『接触場面と日本語教育——ネウストプニーのインパクト』明治書院 (185-196頁)
- 佐々木倫子 (1994) 「会話スタイルとレポート——日英・若い女性の座談例から」『国立国語研究所報告 107 研究報告集』15号、251-286頁
- 服部圭子 (2001) 「接触場面における日本語非母語話者のコードスイッチング——機能を中心に」『大阪大学留学生センター研究論集 多文化社会と留学生交流』5号、39-58頁
- 一二三朋子 (1999) 「非母語話者との会話における母語話者の言語面と意識面との特徴及び両者の関連」『教育心理学研究』47号、490-500頁
- ファン、サウクエン (1998) 「接触場面における言語管理」『国立国語研究所日本語総合シラバスの構築と教材開発指針の作成研究会発表原稿・会議用録』、1-16頁
- (1999) 「非母語話者同士の日本語会話における言語問題」『社会言語科学』2巻1号、37-48頁
- (2006) 「接触場面のタイポロジーと接触場面研究の課題」国立国語研究所(編)『日本語教育の新たな文脈——学習環境、接触場面、コミュニケーションの多様性』アルク(120-141頁)
- 三牧陽子 (2005) 『大学コミュニティにおける留学生のコミュニケーションに関する研究』平成14年度～平成17年度科学研究費補助金基盤研究(C)研究成果報告書
- 宮副ウォン裕子 (1995) 「香港人と日本人の接触場面に見られる筆談について」『平成7年度日本語教育学会秋季大会予稿集』129-134頁
- Azuma, S. (1997). Lexical categories and code-switching: A study of Japanese/English code-switching in Japan. *Journal of the Association of Teachers of Japanese*,

- 31(2), 1–21.
- Bokamba, E. (1988). Code-mixing, language variation, and linguistic theory: Evidence from Bantu language. *Lingua*, 76, 21–623.
- Crystal, D. (1998). *English as a global language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Fan, S. K. (1994). Contact situations and language management. *Multilingua*, 13(3), 237–252.
- Grosjean, G. (1982). *Life With Two Languages*. MA: Harvard University Press.
- Gumperz, J. J. (1982). Conversational code switching. IN: J. Gumperz (Ed.), *Discourse Strategies*. Cambridge: Cambridge University Press (pp., 59–99).
- Jacoby, S., and E. Oches (1995). Co-construction: An introduction. *Research on Language and Social Interaction*, 28(3), 171–183.
- Myers-Scotton, C. (1990). Codeswitching with English: Types of switching, types of communities. *World Englishes*, 8(3), 333–346.
- Nishimura, M. (1995). Varietal conditioning Japanese/English code-switching. *Language Sciences*, 17(2), 123–145.
- Poplack, S. (1980). Sometimes, I'll start a sentence in Spanish y termino en Espanol: Toward a typology of code-switching. *Linguistics*, 18, 518–618.
- Sridhar, K. and K. Sridhar (1980). The syntax and psycholinguistics of bilingual code mixing. *Studies in the Linguistic Sciences*, 10(1), 203–215.
- van Lier, L. and N. Matsuo (2000). Varieties of conversational experience looking for learning Opportunities. *Applied Language Learning*, 11(2), 265–287.
- Varonis, E., and S. Gass (1985). Non-native/non-native conversation: A model for negotiation of meaning, *Applied Linguistics*, 6, 71–90.
- Zuengler, J. and B. Bent (1991). Relative knowledge of content domain: An influence on native-non-native conversations. *Applied Linguistics*, 12, 397–415.